「雄勝ローズファクトリーガーデン」を通じた津波被災低平地における持続的ランドスケープマネジメント

Sustainable landscape management in tsunami affected areas through the “Ogatsu Rose Factory Garden”

秋田　典子　*Noriko AKITA*

千葉大学大学院園芸学研究院教授。2004 年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了，博士（工学）。東京大学国際都市再生研究センター研究員等を経て 2008 年より千葉大学大学院園芸学研究科准教授，2021 年より現職。

一般社団法人 雄勝花物語　代表理事　徳水　利枝，共同代表　徳水　博志
General Incorporated Association, Ogatsu Flower Story

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻市雄勝町を復興するために，“花と緑の力で”を合言葉に被災した地元住民が立ち上げた団体。活動拠点は石巻市雄勝町旧中心部の雄勝ローズファクトリーガーデン。

鎌田　秀夫　*Hideo KAMATA*

仙台に本社のある造園会社，株式会社泉緑化の代表取締役。東京農業大学卒業。東日本大震災後に東北沿岸の被災地の支援活動に奔走し，「花と緑の力で 3.11」活動などに精力的に取り組む。

1．はじめに

2020 年度日本造園学会賞（事業・マネジメント部門）の受賞を心より嬉しく，栄誉に思います。本受賞式が行われた 2021 年は，2011 年の東日本大震災から 10 年の節目となるタイミングでした。雄勝の典型的な風景である雲をかぶった山々と広大な低平地に囲まれ，丁寧に手入れされた美しい花々の咲く雄勝ローズファクトリーガーデンで，今回受賞した 3 者が揃って授賞式を迎える日が来るとは，10 年前には全く想像もできませんでした。

受賞の対象となった雄勝ローズファクトリーガーデンの活動は，東日本大震災で壊滅的な被害を受けた低平地（災害危険区域，移転元地）にて，地元住民が主体となり多様な主体と連携しながら地域の拠点となるガーデンづくりに 10 年間継続的に取り組んできたものです。本受賞の選考に関わって下さった皆様に深く感謝するとともに，これからも力まずに，普段通りの日々の積み重ねとしてガーデンが続いてゆくことを大切にしてゆきたいと思います。

図－1　授賞式の日に関係者でガーデンにて

2．ガーデンの概要

雄勝ローズファクトリーガーデン（以下，ガーデンという）は，2011 年の東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻市雄勝町旧中心部に，地元住民や多くのボランティアの力によって新たに創られた，花と緑に溢れるガーデンである。名前の通り，各種のバラを中心とする季節の花々に彩られ，ガーデン奥の温室には小さなカフェも併設された，様々な人が交流できる開かれた場である。ガーデンは，地元住民をはじめとするボランティアの方々に支えられており，無料でいつでも誰もが気軽に訪れることができる。作業ボランティアも含めてガーデンには毎日様々な人が訪れ，自分なりの時間をゆったり過ごしてゆく。高齢者や車椅子でも安心して過ごすことができるヒューマンスケールで居心地の良い空間である。

ガーデンが位置する石巻市雄勝町旧中心部は，美しい湾を囲むように急峻な山が迫り，海と山の間のわずかな隙間に小中学校や役場，小規模な店舗や漁協などの業務施設が肩を寄せるように立地していた。雄勝の山では硯やスレートの原料になる石材（玄昌石）が採れ，川は清流に恵まれ，海は豊かな漁場として栄えた。雄勝半島には 15 の浜があり，ガーデンが位置する旧中心部は各浜の中心としての役割を果たしてきた。

しかし，2011 年の東日本大震災で雄勝町は高さ 20m を

図－２　穏やかな雄勝湾の風景

図－３　最初のメドウガーデン

越す津波に襲われ，旧中心部は壊滅的な被害を受ける。震災前に約 4,000 人いた人口は一気に 1,000 人にまで激減し，600 世帯以上が暮らしていた町の中心部全域が災害危険区域に指定され，誰も居住できなくなる。このように，町全体が災害危険区域に指定されたのは，東日本大震災の被災地では雄勝町のみである。雄勝ローズファクトリーガーデンは，この津波で被災した低平地に存在する。

３．活動の始まり

本事例は，ランドスケープ分野の大学教員（秋田），地元の活動主体である住民団体（雄勝花物語：徳水利枝氏，徳水博志氏），ガーデンの造成や維持管理を技術面・資材面でサポートする造園会社（泉緑化：鎌田氏）の３者で共同受賞している。ガーデン活動の実施は，３者がそれぞれの特性を生かして異なる役割を果たしてきたため，関わり方や現在に至るプロセスの見え方は，３者で異なっている。これが本事例の特徴であり，強みでもある。ただし，本稿はストーリーのまとまりを勘案して代表で秋田が執筆した。予めご了承いただきたい。

雄勝ローズファクトリーガーデンの始まりは，本賞の受賞者である一般社団法人雄勝花物語代表理事の徳水利枝氏が，2011 年８月に津波で流された母親や叔母・従弟の霊を弔うために，瓦礫に埋もれた雄勝町中心部の実家跡地に花を植え始めたことがきっかけとなっている。

一方，筆者は 2011 年３月の震災後に，当時３年生の学生から被災地を花と緑で支援したいとの提案を受け，東北大学の知人を通じて石巻市役所とコンタクトを取り，石巻市半島部に位置する雄勝町の仮設住宅を 2011 年７月に紹介される。2011 年８月より筆者と学生たちは雄勝の仮設住宅で花を植える活動をはじめるが，仮設住宅の居住者と親しくなるなかで，「仮設住宅に花を植えてくれるのも嬉しいけれど，自分たちの町が見捨てられているのが悲しい。そこにも花を植えて欲しい。」という声を耳にする。しかし，その当時，雄勝町中心部は瓦礫が撤去されただけで，どこに花を植えて良いのか全く見当がつかない状況であった。そこで仮設住宅の居住者から，雄勝町の入口にあるＴ字路の付近が花植えの適地ではないかとのアドバイスを受けて現地を訪れると，偶然そこで花を植えていた徳水利枝氏に出会う。花植えをお手伝いをさせて頂けませんかと声をかけ，雄勝のガーデン活動との関わりが始まった。

震災から１年後の 2012 年３月には，受賞者である鎌田氏のサポートにより，百人以上のボランティアの協力を得て約 1,500m^2 の大規模なメドウガーデンが造成された。この場所につくられたメドウガーデンは，東日本大震災で被災し色を失った低平地の中で，唯一大規模なガーデンとして彩りある花が咲く場所になった。

４．雄勝ローズファクトリーガーデンの誕生

その当時，多くの被災地では，津波の被害を直接受けた低平地は放置されたまま手付かずであった。このため人の気配があるメドウガーデンには多くの人が訪問し，立ち寄るようになる。我々は花と緑の力の大きさを実感し，2012

図－４　2013 年の雄勝ローズファクトリーガーデンのオープン

年度からは鎌田氏の指導のもとで本格的なガーデンづくりに着手する。作業には千葉大学園芸学部の学生も含めて千人以上のボランティアが参加し，2013 年 10 月に雄勝ローズファクトリーガーデンがオープンする。ガーデンがオープンした後も，継続的に多くのボランティアが通うようになり，復興事業が未着手のこの場所で，ガーデンは唯一住民や地区外の人々が立ち寄れる場となってゆく。

一方，この頃になると，雄勝町でも少しずつ復興事業が具体的に動き始める。低平地の中で唯一土地利用がされていたガーデンにもその影響が及び，敷地に堤防事業と連動する道路事業がかかり，ガーデンは存続の危機に立たされる。ガーデンは住民と多数のボランティアの手作りによる唯一無二の空間であり，再現性がない。そうした中で，地域住民にとって大切な思い出の場所である小学校跡地へのソーラーパネルの設置など，予期せぬ土地利用が発生してゆく。既にガーデンは多くの人が訪れ，雄勝の中心部の復興を牽引する役割も果たしていた。ガーデンの存続は低平地全体の将来計画と合わせて検討する必要があると考え，ガーデンの移転計画と並行して低平地全体の将来土地利用計画の検討に取り組むこととなる。

5．土地利用計画への展開

2015 年に，雄勝花物語はガーデンと周辺敷地の将来土地利用計画を，千葉大学秋田研究室は低平地全体の将来土地利用計画を提案している。しかし，その当時，行政は高台移転や拠点計画で手一杯であり，低平地に関心を寄せる余裕のない状況であった。また，半島部は市役所と総合支所という二層の行政体制になっており，復興事業の範囲外の低平地の土地利用計画を住民発意として行政に提案することは，困難を極めた。それでもワークショップを重ねて地元住民の合意形成を進めながら将来土地利用計画を何度も修正し，雄勝総合支所に粘り強く説明と提案を続けた。そうした中で，少しずつ低平地の計画の必要性に対し行政の理解が得られるようになってゆく。

図－5　初期の雄勝中心部土地利用構想

将来土地利用計画の策定作業と同時進行で，新ガーデンの移転作業も進められた。既に全国にファンがいたガーデンには，移転作業も地元住民に加えて全国から集まった多数のボランティアの支援に力を得て，手作業で進められた。震災から 7 年後の 2018 年 3 月には，地元住民，支援者，

図－6　住民とのワークショップ

図－7　新ガーデンの擁壁づくり

図－8　2018 年の新ガーデンのオープニング式典

行政，ボランティア，学生，企業，大学関係者など多くの人に見守られて新ガーデンがオープンする。

6．本活動の意義

このような被災地における花と緑によるコミュニティの再生活動は，復興初動期に他の地域でも同時多発的に取り組まれてきた。しかし，防潮堤や高盛土道路，高台移転などの大規模な復興事業の導入において，ガーデンのような草の根レベルの小さなランドスケープマネジメント活動は殆ど考慮されない。したがって，被災直後に仮設住宅や低平地に形成された多くのコミュニティガーデンは，復興事業の過程でその大部分が消滅している。筆者が関わった他地域のコミュニティガーデンでも，同様のケースが複数あった。雄勝ローズファクトリーガーデンもその例外ではなく，津波の被害を受けた広大な低平地で，唯一の花と緑あふれる復興の拠点になっていたにも関わらず，復興事業の実施により移転が余儀なくされている。この時の関係者の落胆や喪失感は，今でも言葉にできない。

だが，本事例では危機を地域におけるガーデンというランドスケープ空間の必要性や意義を考え直す機会として前向きに捉え，地元住民や関係者とワークショップで検討を重ね，最終的に道路事業の影響を受けない近傍地へのガーデンの移転という結論を出す。更に低平地全体の土地利用計画を検討し，ガーデンを低平地将来土地利用計画のコアとなる花と緑で雄勝の来訪者を迎える場として再定義することに繋げた。この将来土地利用計画の最大の特徴は，自分たちが願う夢のような土地利用を描くのではなく，各プレイヤーが自ら土地利用とマネジメントを提案し，それに基づいて将来土地利用計画を描いたことにある。その後，ガーデン活動は復興庁のモデル事業に採択され，継続して低平地の土地利用計画の検討を進め，2018 年 5 月には雄勝花物語を含む地元の複数団体が共同で，石巻市長に対し自らがマネジメントの主体として将来土地利用計画を提案するに至っている。

本事例は人口減少や急激な衰退に見舞われている地域でも，ランドスケープ空間を通じた地域再生，地域マネジメントが多様な主体の協働で実現できることを具体的に提示していると言えよう。

もちろん，ガーデンが継続してきた背景には，こうした取り組みだけでなく，花と緑による協働・ボトムアップの手づくりのランドスケープ空間そのものが魅力的であったことがある。美しい花に囲まれ，愛情をかけて毎日丁寧に手入れされたガーデンは，年に２回だけ業務として管理が行われる公園とは全く異質の空間である。しかも，そこにある花は見せて稼ぐためではなく，訪れる人を温かく迎えるためにある。様々な困難を乗り越えながらも，このガーデンが 10 年間継続してきたのは，ガーデン自体の空間の魅力が揺るがない基盤としてあったからである。

7．現在進行形から未来へ

本事例は，ランドスケープマネジメントという側面以外にも，いくつかの重要な論点を包含している。そのうち２点について，以下で述べたい。

１つはジェンダーである。本事例では，女性や高齢者がその活動の中心的な役割を果たしてきた。とくに高齢女性のサポートは，ガーデンの精神的支柱にもなってきた。また，これまでまちづくりのプレイヤーとして自身を意識していなかった女性たちの間にも，ガーデンとの関わりの中で次第に主体意識が醸成されている。ガーデン活動を支えるボランティアのメンバーに若者が多く参加しているのも特徴である。学生ボランティアの参加も多く，千葉大学園芸学部の学生だけでも延べ 1,500 名以上が現地で作業に参加している。ガーデンは，被災地の復興を支援したいという志のある若者を受け止める貴重な場にもなっており，多様性はガーデンの持続性の源泉となっている。

もう１つは脱成長である。本事例は，身の丈の活動であることを最も重視している。広大な低平地を全て管理することや，無理をして活動範囲を広げることは想定していない。これは 10 年間自ら手を動かし，汗をかいてきたことを通じて，自分の力で出来る範囲を十分理解しているからである。逆に，この活動に継続的に参加することを通じて感じるのは，私自身も含めてこの活動に関わる主体それぞれの「自分の手の力」が育っていることである。

ランドスケープや土木をはじめとする近代技術は，近代以前に人の手が持っていた空間に関わる様々な技術や力を専門分野に集約し，大型化・効率化を図ってきた。ガーデン活動は，それを自分自身の手に取り戻す経験の場であり，身の丈を基本的な物差しとして，急ぐ成長ではなく，ゆっくりと成熟を目指す持続的な活動なのである。そこに完成や終わりはないからこそ，手入れも含めて日々の小さな変化を発見し，楽しみ，未来の変化を柔軟に受け入れることができる。

本稿を締めくくるにあたり，お世話になった方々へ感謝の意を述べたい。この事例の成立の背景には，多くの地元住民の方々，数え切れない全国のボランティアの方々，千葉大学や地元大学の学生ボランティア，企業のボランティア，地元行政である石巻市や雄勝総合支所，国土交通省や復興庁のサポートが不可欠であった。この場を借りてお礼を申し上げたい。こうした多様な方々に支えられる場であることこそが，この空間の価値であると考えている。